

葉書通信（本記念號發刊に際して諸方より御芳信を頂き得たる事を喜びます）

著者	松浦，寅三郎，櫻井，房記，戸澤，正保，由比，質，小橋，一太，上田，萬平，高畠，喜市，有働，良夫，伊藤，久米藏，辻，寛治，松井，元興，副島，豫四郎，近重，眞澄，武藤，虎太，西，盛之進，乗杉，嘉壽，林，市藏，速水，滉，大谷，彬亮，江部，淳夫，川口，虎雄，厨川，白村，古閑，又五郎，池田，泰親，山田，準，緒方，十右衛門
雑誌名	龍南
巻	176
ページ	22-31
発行年	1921-02-11
URL	http://hdl.handle.net/2298/7566

葉書通信

(本記念號發刊に際して諸方より御芳信を頂き得たる事を喜びます)

前校長 松浦寅三郎

拜啓 各位愈々御清祥奉恭賀候貴校創立三十週年祝賀會に付度々蒙御通知候處一々御返事も不申上多罪御寛恕被下度候猶今回御申越の奇稿の儀も差控度候間不惡御諒承被下度候先は右御詫旁貴酬迄申上度候

前校長 櫻井房記

拜啓 來る十月の紀念號に對し執筆致すべく様御依頼に候處小生近頃少々健康を害し保養の爲め不日旅行の途に就くべく候に付乍遺憾御依頼に應し兼候間右御斷まで早々如斯に御座候 拜具

山口高等學校教授 戸澤正保

私は明治四十年の九月に赴任して、大正九年の八月に山口高等學校へ轉任しましたから、滿十三學年五高に奉職して居た譯ですが、其中二年半は洋行及び其往復に費しましたので、正味は十年半程實際の教

授に預つて居ります、私としては一生涯中の一歩の働き盛りを五高に捧ぐる次第ですが、顧みて何程の効果を擧げ得たかと思ふと穴へでも入りたくなります、ただ此間一時間でも教場で不愉快だと思つたことのないのは、私の心から満足する所であります。

松山高等學校長 由比質

小生は明治四十年二月千葉中學校より貴校に轉任し大正二年十月まで在職しました其間貴校の發展に對し之を阻碍する様な罪惡はあつても何等功績はないものであります、乍併龍南の地の自然と當時同勤の職員諸君及び在學の同窓諸君の御厄介になりました因縁とは小生に取りまして何時までも感謝すべく又た忘れがたき記念であります、就ては貴校三十周年記念に際し當時を追懷しまして願くば此等の諸君と共に祝賀の慶を共にし且つ現職員生徒諸君の御健康を祝し貴校の將來益々隆昌ならんことを祈ること

を許していただきたいと思ひます。

創立第二年の松山高等學校に於て

内務次官 小橋 一 太

余は今年四月歸省の際久方振りて五高を訪問した。余が五高に入學したのは學校創設の際であつたが、其の當時校庭附近に栽植された小松が今は美事に成育して鬱鬱たる松林を成せるには一驚を喫したのである。余が學校を出てから最早二十六年時勢は幾變轉して我國運の伸張は寔に異常のものであるか、此間の五高が幾百千の有爲の青年を教養し、社會の各方面に活躍せる多數の名士を出せることを思ふて衷心より欣快の情に堪へなかつた將來校勢の益々發展して長に松の緑と其の色を競はんことは余が切に祈念する所で、余が長男一雄も此の思出深き五高に入學させる事にした。

大阪府内務部長 上 田 萬 平

母校を出ましてから既に十五年にもなりませうか、其後一度も伺つた事が御坐いません誠に申譯があり

ません、寄宿舎の板の椅子が吾々學生の尻の重味で耗込んで居た事には今尙驚いて居ります、あの寄宿舎のうら寒き冷き當時の有様は未だに記憶から脱しませぬ、今日は時代も變りて居りますから當時よりは暖に熱ある空氣が舎内に漲りて居る事と信じます校門前の菓子屋には屢潜んで行きましたが其の様な低級な嗜好は今日の學生諸君にはあるまいと存じます、如何ですか。

四高教授 高 島 喜 市

始めて上熊本驛に瘦こけた自分を見出したのは、明治四十年四月三日のことです、立樹の多いのと、軍人學生の往來繁きとは、現任の金澤そっくりです、龍南校も氣に入りました、あの明るい位置と、ゆつくりした敷地は、獨り龍南校の持ち得る誇です、詰襟に足駄がけの教官方の多かつたのは出色のことで泥濘を活動するにはこれに限ると思ひました、爾來時は容赦なく移つて居ますが、今頃は武夫原頭にも矢張り秋色が漂ふて居ませう、殊更露骨に肉体美を誇るまでの必要は毛頭ありません、龍南には

また龍南の特色が欲しい様に思ひます。

農學博士 有 働 良 夫

小生は明治三十年に五高を卒業致して補充科、豫科本科と合計七年に亘り在學致し龍山の緑白川の流に深くも親しみしものにて今日に於ても五高の印象は最も強く當時の學友は最も親しみ多く相覺む七年間に亘る長き在學の難有味を感じ居るものに候

工學博士 伊 東 久 米 藏

謹祝貴校三十周年

小生の動靜本年十月末迄は神戸市和田岬

三菱内燃機製造株式會社神戸分工場に同社の常務

取締役として勤務致し居り候處來る十一月より名

古屋市熱田東築地に新築中の三菱内燃機製造株式

會社本店に轉勤可致候同會社は重油發動機、飛行

機、自動車等の製造をなすものに御座候

醫學博士京大教授 辻 寬 治

余が五高を出でから十八年になる、其後一度も母校

を尋ぬる機會を得なかつたのは誠に遺憾である、けれど、在學當時の事ども例ば質朴なる寄宿舎生活や廣い校庭に於ける運動會或は龍田山又は水前寺の散歩など思ひ出すこと屢々である、殊に年々當大學に來らるゝ卒業生諸君より最近の狀況を承り一層懷舊の情を温めて居る、本年丁度三十周年記念祝賀會を催さるゝに當り切に將來の發展を祈るものである。

理學博士京大教授 松 井 元 興

僕等が在學して居た頃寄宿舎一日の食料は高くて八錢安い時は六錢五厘位で濟んだと云つたならば今日在學の諸君の耳には神代の話の様に響くかも知れない。立田山の舊態依然たるを外にしては母校の内外は申す迄もなく思想感情等の形而上のもの迄過去三十年間に全然一變したことゝ察せらるゝ。幸に此變化が進歩であつて退歩でなく向上であつて墮落でなく建設であつて破壊でなく醗酵であつて腐敗でなかつたと云ふことが此三十年記念を意義あり又祝賀すべきものとするのである。

今や險惡なる世界の思潮は奔馬の勢を以て押寄せて居る將に來らんとする三十年を過去の三十年と全様の光榮あるものとするには一段の奮發と不拔の覺悟を要するではあるまいか徒に世運の推移に身を委ねて舵手なき舟の如く流がるゝがまゝに流れて居ては國運の前途も氣遣はるゝではあるまいか過去を祝すると共に戒心すべきは實に此點にあると思ふ。

醫學博士 副島豫四郎

五高を出で、早や廿年、當時を回想し青春時代が恐らくは生涯の最も樂しき時代なるべしとの念を起さざるを得ず、これ蓋し希望に満ちて、責任は輕ければなり。大學に入り業を卒へ社會に出つと共に、世間が五高時代に考へ居たるが如き單純の者ならざるを悟れり、されどもまた同時に、社會は何時になりても人物と人才とを必要とするものなるを明にせり余は五高生徒諸君が他日我日本國の示導者、先覺者たるの資格を得らるゝの準備に怠たられざるを信せんと欲す。

理學博士京大教授 近重眞澄

熊本は余が社會へ打つて出でたる門出の場所で今に思出ふかき由縁の土地である。在職二年半にして其地を去り爾來二十有二年。今一度は其地をふみたと思ひつゝ尙ほ未だ宿志を果さず。遺憾の極と考ふる次第である。年々五百の健兒が生み出さるゝとすれば二十二年の今日には已に一萬一千人になつて居る誠に偉大の勢力といはねばならぬ。其一萬の人波の中に沖の小石のその如く兎も角も舊容を具へて世に存在する此身を顧みて感慨無量に禁へざるは蓋し當然の事と信ず。今茲三十週年を期して龍南會誌の記念號を出さるゝ由にて一文を徵せられ圖らず愚懷を摠へた。終りに余が知非の感一則を記し、伏乞叱教。

人生纔五十。進退須察機。二十學初就。三十時習之。四十完功業。餘生宜摠遲。奈何稟性拙。回顧志多違。滔々流水逝。空嘆伯玉非。前程不可識。世途險歟夷。問天天不答。無心白雲飛。

拜復

吾等の母校開校三十周年記念祝賀會御舉行に際し校友會雜誌龍南記念號御發行の由にて何ぞ寄稿可致様御頼囑の趣拜承仕候小生は五高創立の際入學致し豫科本科を通し五年間在學致候事とて既往を回顧すれば思出も多く述ぶべき事も多々有之候へども締切期限も切迫致し且は少々多忙に有之不取敢近稿一首を録して御返事に代へ申候 匆々

將游歐米諸國視戰後文教之趨勢試賦

一朝大陸戰塵收。列國經營又運籌。

牖戶綢繆堪致意。星槎萬里向歐州。

大正庚申初秋

武藤 菊 潭

醫學博士 西 盛之進

吾々の五高在學は明治三十年前後ではや廿數年の昔となりました當時を追懐して今も猶同人間の話の種が盡きませぬ鹿兒島の高等中學造士館が廢校になり吾々五十余人轉校して五高に入學したので初めて異境に來りて九州一帶四國並に日本全國各地の健兒と

交り學ぶ機會を得て三ヶ年間に愉快に過したのですが其間に於て今にも忘るることの出來ぬ頗る興味ある大問題が多々起りそれに吾々も關係したが其一つは寄宿舎の自治制度を創めようとした湯淺廉遜君は其大將であつたが五常議員を置いて仕事を始めようとして反對の聲が起り特に野元熊本を初め佐賀其他出身の人々に依て舎監制度の土地の情勢に適して安全の道なるを主張せられ大討論の末遂に變革の大業は挫折したのであつた次は鹿兒島と他方熊本長崎縣人間の大半闘で些細の事件發展して寄宿舎の能勢舎監まで頭を打たれたる事件但し後は有志者の談判に依て平和解決となり櫻井校長の喜ばれた顔が今も忘れられぬ。

文部督學官 乘 杉 嘉 壽

私の五高在職は明治四十一年の初冬から同四十三年の晩秋までの僅三年足らずであつたが此短かい熊本生活は甚だ思出多きものであつた。まだ經驗も學徳も淺いながら教壇には立ち殊に生徒監として旦夕生徒諸君に親炙して種々の劇務を執掌して居た當時の

元氣さは新に五高に入學して意氣冲天の勢で武夫原頭に蠻聲を張り上げて居た生徒諸君の夫れと甚だ似通つたものであつた。爾來關東統監府に轉し再轉して文部省に入り今日に至りました殊に戰時中二ヶ年間歐米交戰各國の巡歴は多大の經驗を得ました既に文部省で社會教育といふ新しき事務を擔任して專心一意邦家社會に貢獻せんことを期して居ます。當時の五高生徒であつた諸君も今では夫々社會に活動して居られるのを見るとき武夫原の松も大分丈も高くなりその緑りも益濃かに五高の繁榮の象徴となつて居ることと思ふ謹て五高三十週年記念祝賀會の盛儀を賀し五高の繁榮を祝福致します。

拓殖銀行頭取 林 市 藏

私は五高第二回の卒業です。在學中の記憶は人生のバラダイスです。當時は學生の原始時代です。日々の學科以外には將來の事など考へる様な利巧者は全くありません。ませむてした杉山先生の御誠意には感謝しなければなりません。數十年の御勤續は實に敬服致します。御卒業のホヤ／＼で吾々は教を戴いたものです。第二の武

藤校長が校中第一の美聲で何時も「鞭聲蕭々」に感心しました。藤本君の人間主義は有名なものでした。回顧すれば人生は健康が第一と感します。

第一高等學校教授 速 水 澁

小生は明治二十七年に五高に入學したものです。當時恰かも三高が専門部になつて一時廢校された時で（此事を近頃の學士學生の諸君に御話すると皆意外な驚を感せられる）小生共は三高に這入るべき筈であつたのが、（其頃は高等學校の管轄區域が定まつて居た）妙な運命で熊本に往くことになつたのです。當時の五高は正直に云へば、一種の排外的氣風が盛んであつた。是は始めて九州以外から入學生を迎へたのであるから、無理からぬ點もあるが、兎も角小生等他國者は自然小さくなつて居らねはならぬ有様で、其ため許でもないが、在學三ヶ年間の學校から得た印象は少なくも小生に取つてはかなり陰鬱な、不愉快なものであつた。但御蔭で九州の山川に親しむ機會の興へられたとは、今でも常に懐しい想出となつて他地方で得難い感化を受取つたと喜んで居ます。

醫學博士 大谷 彬 亮

校門を出て、既に十八年。後庭の松林の中にありし射場が懐かしい。日本一の稱ある生駒先生の射前は流石に見事であつた。今も猶目に残りて居る。京都に移りて後も弓は癢さなかつた。否益々盛に行つた殊に卒業試験期の九、十、十一月の三箇月は毎日々々雨天の外は癢さなかつた。それで試験期には瘦るどころが益々頑健となつた。試験などは丸で眼中になかつた、全たく矢の如く勢猛に之れを突破した。最後の人生の卒業試験にも矢張この勢を以て突進し得るや否やは勿論疑問である然し弓の徳は廣大なるものである。其大弓宗に歸依したのは五高の裏庭の松林射場である今も忘るべからざる懐しみを以て居る。

文部督學官 江 部 淳 夫

私が龍南に在勤したのは明治四十三年の秋から大正七年の夏までありました。此滿八年の間には自分の家庭でうけた大打撃は別としても社會上には幸徳事件以來随分激しい變動があり、國際間には有史以

來の大戦ありすべて是等の變化に處して行かねばならぬ思想上の方面を擔任し、わけて「大正二年」の苦い經驗などもあつて私にとりては中々に忘れ難い深酷な印象が刻みつけられてゐるので、何につけても先づ想ひ出すのは龍南であります。わけて諸君が龍南のシムボルとしてゐらるゝ蘇山白水と武夫原上の月見艸とが此回想に文を興へてゐるので丸の内あたりで殆ど毎日のやうに出會ふ五高出身の諸君とよくその事をいふてはお互に會心の笑をかはずであります。此龍南の傳統は三十年記念の今日でも矢張り潑潑として居りますか。(九、九、二三)

廣島高等工業學校長 川 口 虎 雄

母校三十周年記念

私は明治二十三年九月母校に入學し翌月十日第一回記念式後の運動會には新參者ながらも四百四十碼競争に加はり首尾よく第三等賞牌を勝得ましたが一回たも練習しなかつた悲さには甚疲勞して數日間身体を自由を失ましたことは尙私の記憶に残りて居まして三十周年記念祝賀會舉行の報に接して今更ながら

懐古の情に堪へません竹輪片手に龍田山上に開いた
會費五錢の懇親會、旭日を拜まんとて深更金峰山迄
の強走行、舎監を先導に寮内廊下の喧騒なる行列、
不品行者を道場に引出しての制裁寮生自治生活の先
驅となつた自炊開始當時の情況等限りなき追想に轉
三十年前に若返りたる心地が致します今から考ふれ
は多少滑稽に類することもありましたが此時代に養
はれたる龍南健兒の剛健素朴の風か今尙潑刺たるも
のあるのは誠に喜びに堪へません茲に滿腔の誠意を
表はして母校の益隆盛ならんことを祈ります。

京都大學 厨 川 白 村

明治三十七年から四十年まで滿三ケ年間奉職したの
でした。學校を卒業してすぐに赴任したので、金銀
の附いた學生服を着て、はじめて學校に出頭した事
を記憶してゐます。以前やはり五高に居られた夏目
先生が「君も赴任したらどうだ」と云はれたので、
はる／＼東京から筑紫のはてまで行つたわけです。
時々熊本時代の事を今も憶ひ起します。

辯護士 古閑又五郎

拜啓三十年と云へば、下世話に所謂三昔しと云ひま
す、随分古ひ事の様に考へられます、其間には學科
も増加し學生も倍蕪しまして、完備の域に達した事
は云ふ迄もありませぬ、同時に校規校風等も幾變遷
した事と思ひますが、唯變らぬのは、前を流るゝ白
川の水と、四時氣焰万丈の阿蘇の烟と、そしてへの
字姿の龍田山とであります、校庭に植へふれたる幾
千株の松は、當時僅かに貳三尺の矮木に過ぎなかつ
たので、輒もすれば心なき我等の爲に礫みにじらる
、事もありましたが、夫が今では亭々として雲を凌
ぐの喬木となりております、而も其持前の深緑を失
はずにです、私は母校の附近を通行する毎に、此遠
景景色の變りなきを懐かしく思ふと共に、其の校規
校風が庭内の松の高く清くそふして長へに綠なるが
如く而して聽ては夫が熊本は勿論九州の教育界を、
風靡し刷新し指導するの模範となり目標たらんこと
を切に祈る次第であります、何も別に申上る事もな
ければ右の通りに候

龍南會雜誌が今回三十周年の記念號を發行せらるゝ由にて當時の廻想と近情とを知らせとの事て面白き事と思ひます何様も三十年も前の事ですから秩序も今日の様に整ひませんが元氣だけはあつた様です會名を附くるには全校生が集つて龍田山の南だから龍南がよかろと誰言ふとなく決した様です寄宿舎なども龍南會の總務か炊事の委員を兼ねて居りました初代の委員長か武藤虎太君(今の第二高等學校長)であつたが賄時代よりも御馳走がなく却て費用がかつた始末でしたけれど賄征伐後の自治と云ふ美名の下に生徒も我慢を致しました我等も當時の補充一級(今日では中學二年程度)時代に購入委員とかを務めで米やら野菜薪炭等を受取りに立會つた事かあります誠に不完全な次第でありました此の後の三十年間には如何なる進歩を來し龍南の健兒からごんな世界的人物が輩出するかを私共は期時して居ります。

二十年前の回顧 前教授 山田 準

小生は明治三十二年秋長尾教授の後任として赴任し

兒島須藤の二教授と漢文を分担した其年珍らしく感じたのは年中行事の一なる兎狩であつた翌年年首は兒島落合二教授と耶馬溪を探討した二月十八日は九州史談會が三年阪教會堂に開かれ小生は藪孤山の講話を試みた三月廿日には松本教頭の退任式があつたが教頭は留別の辭に生徒の長所として質朴と剛毅と勉強とを擧げ短所として遲鈍と運動を好まぬことを擧げられたが一種の刺激を生徒に與へたやうであつた四月十八日には中川校長の退任式櫻井校長の就任式があり翌日は錦山祠前で教職員生徒五百餘人中川校長を迎へて寫眞を撮つた此は當時の紀念として今尙小生の書室を飾つて居る是月の廿七日には辯論部が徳富蘇峯氏を迎へて演說會を開いた氏は人物本位國家本位と云ふやうな題の下に得意の辯を振つた其次に小生は支那文學上の講話を五十分程試みたやうに覺へて居る七月には入學試験をすまして家族を東京に見舞ひ九月に歸校した後の一學年は割合に無事で通し九月から鹿兒島の七高へ轉任し爾來二十今年日まで勤績して居る貴校三十周年紀念會の企を聞いて思を當時に回らせば殆ど隔世の感がある。

將來醫學に志ざされる學生諸君に聊か御參考にもならんと存し少々御話し致します、偕て私は本校第三部の第二回卒業生でありますが其頃迄は醫科大學も東京丈けで其東京醫科大學の模様か其當時には一向本校に分りて居らず只だ想像丈けで大學の講義は總て獨逸語であるとか、醫學の參考本は非常に難解の者であるとか云はれて難解の獨逸文の譯讀に全力が注がれた時には字引にない難句などが試験問題に出て丙などと云ふ點數を頂戴致したこともある様に覺へて居ります、所が實際の所講義は名詞や動詞は便宜上獨逸語でありますが多く日本語の混ざりであり、以上の如き困難な文章か讀めなければ理解の出來ないとはありません醫學の參考本も少々慣るれば決して左程理解に苦むとはありません勿論獨逸語教授法には一定の規定がありましようから傍から色々言ふことは出來ますまいが私の希望する所はまつと平易な文章を充分に理解し、殊に動詞の運用が充分に出来る様に丁寧な反復して殆んど文句を暗記する様に教わつても頂戴したいし又受ける方も其心で勉強して

もらいたいのであります又文章も日本人が書いたのは日本的獨逸文との惡口がある様でありますが此等は文法上に誤りはないが獨逸人には通用しないと云ふことでありましよう、會話の如きも彼のベルリッツ讀本の一を充分に勉強して置けば一寸の用はたせませんが、私等の時代ではどうも余り進みすぎで足もとが暗く私のように獨逸語の下手の者は非常に閉口致しました、今日の醫學は日本が非常に進歩し殊に臨床上のことに就ては決して彼れに劣ることはない様でありますが醫學を勉強するには矢張り獨逸語は必要であります又充分に之をやりて置かなければ非常に損になります又現在では今迄の様に獨逸語丈けでは用が足りない様になりました殊に研究を世の中に發表するには戦後の今日では獨逸語では通らない様になりましたので英語が必要となりました又從來醫學者として研究に従事する人は彼の佛蘭西語も亦必要であります此等のことはつまらんことであります私自身が獨逸語が下手で困難したので今后醫學に志される諸君に御參考の爲めに申述べ次第であります。